

<http://grimreaper.is-mine.net/>

リリアンになりたい  
墮天使Kの話

著：射月アキラ

感情を抱くようになったきっかけを、梶宮はよく覚えていない。それどころか、最初に感じた情はなんだったのかすら、はっきりと断言できない。

孤独に役目を果たすしかない無気力感か。かたわらに誰もいない寂しさか。

自らの役目によって結ばれる、地上の男女に対する嫉妬心か。

全てを混ぜ込んだ、言いようのないごちゃごちゃとした感情だったのか。ともかく。

なにかを「思った」瞬間に、梶宮は地に堕ちた。

鉄筋コンクリートの建物が立ち並ぶ、人の流れのただなかに立っていたことを覚えている。

東京。

天から堕ちたその場所を中心に、梶宮は今も地上をさまよっている。

堕天使——それも、恋人同士を強く結びつける、キューピットの堕天使として。

ふらふらと、当てもなく人の波に乗り続ける梶宮に、明確な意思などひとつもない。どこに行こうとか、なにをしようとか、そういう願望を持つことは、いまだにできていない。

かつて、目についた仲睦まじい男女の小指同士を赤い糸で結んでいたときのように、彼の行動に「理由」はない。強いて言うならば、堕天する前は天使としての使命に従っていたのだが、その使命がなくなった瞬間、梶宮を突き動かすのは不完全な感情だけだった。

今は、無気力感。そして、ふとした瞬間に湧きあがる嫉妬心。

道行く人々を眺めているうちに、梶宮の目が一組のカップルを捕えた。

十代後半と思しき二人組は、周りに人が多すぎるといふ点を考慮しても密着しすぎていた。女が男の腕にしがみついているような格好は、ある人が見ればほほえましく、別の人が見たらねたましいものだろう。

そして梶宮は、言うまでもなく後者の側だった。

じわじわと、どす黒い感情が湧きあがる。いくつものカップルを運命的に結

びつけた経験のある梶宮は、しかし墮天した今でも独りだ。人混みの中にいれば孤独感は多少まぎれるものの、かたわらに居るのはいつだって他人。孤独であることに変わりはない。

故に梶宮は、妬む。

愛するものがいる人を。愛してくれるものがいる人を。

その嫉妬心は、墮天使の特性——天使であった頃と正反対の能力を得る——と相まって強いチカラを持つてしまう。

恋人同士を強く結びつける能力の反対。すなわち——

恋人同士の関係に、亀裂を入れる能力。

「……リア充ばくはつしろ」

ぼそり、と梶宮が呟いた瞬間、人混みのあちこちで空気が変わった。

——ある男は、相手にとつての禁句を言ってしまった。

——ある女は、相手に隠しておくべきホンネを口に出してしまった。

——ある男は、相手の友人と付き合っていたことを暴露してしまった。

——ある女は、相手の浮気相手を見つけてしまった。

関係に亀裂が入る音すら聞こえてきそうなほどに、梶宮のチカラは暴力的だった。

通りのあちこちで、小さきまざまないさかいが起こる。どす黒い感情が流れ落ちていき、口元に笑みが浮かぶのを、梶宮はゆったりと感じていた。これほど心が安らぐのは、チカラを解放した直後のみと言っている。

もちろん、梶宮の前を歩いていたカップルにも、チカラの影響はもたらされていた。

必要以上に密着していた女は男から距離をとり、数回なにかを言い合ってから、男から逃げるように梶宮のいる方へ走りだす。

その女を——正確には十代後半の少女を——見た瞬間、梶宮の顔から笑みが消え去った。

ダークブラウンに染められた髪は、陽光に照らされて水の流れのように輝いている。聞きたくない言葉を聞いたのか、あるいは他の理由からか、まつ毛にふちどられた瞳は涙に潤んでいた。衣服のそでで覆った手が口元を隠しているのは、自分の泣きそうな情けない顔に気づいているからだろうか。踵の高い靴で走っているため、足の運びはどこかおぼつかない。

呆ける梶宮のとなりを、女は走り去った。柑橘系の淡い香りだけがその場に残される。

さつきまで女と共に歩いてきた男が困ったように立ち尽くしていることすら、梶宮の目には映っていないかった。

女を見た瞬間の強烈な衝撃をとまなう感情に、ただ戸惑うことしかできない。周りの喧騒も、その大多数を占める男女の言い争いも、どうでもいいものように思える。

この感情はなんだ？ と梶宮は自問する。分らない。多様な人間を見続けてきたというのに、知っている感情が少なすぎる。

ただ、走っていく女の姿が、脳裏に焼きついて離れないことだけは理解できた。今更のように、梶宮は振り返る。

当然、そこに女はいない。しかし、それでも梶宮は走りだしていた。

孤独感を何倍にも凝縮したような「片思い」だと理解するのは、女を見つけれないまま日が沈んでしまった直後のことだった。

二

休日の人気テーマパークとなれば、人の数はいつそ暴力的だ。

アトラクションはほとんどが一時間待ち。パレードが通るとなれば、場所取りからしなければマトモに楽しむことはできない。土産店も飲食店も空くタイミングはなし。それでも客の表情が明るいののは、テーマパークの隅々まで徹底された、非日常的な雰囲気の影響だろうか。

——そんな中でも、例外的な、ごく日常的な空気を放つ二人組がひとつ。

「へえ、つまり、お前は、地に墮ちるだけじゃあ飽きたらず、恋にまで落ちた、と。なるほど」

半眼で嫌味ついたらしく言う男のとなりで、梶宮は頭を抱えていた。テーマパークにいながら男二人が並んでベンチに座り、誰を待つでもなくグダグダと話している様は、よく見れば浮いているはずなのだがほとんどの人間が気にしていない。

非日常的空間の中で、他人に興味を向けることがほとんどないからだろう。背景に同化するようにして、二人組は会話を続ける。

「はっはー、そうかー行く先はリア充かー。カシミヤのくせに生意気だぞ爆発

しろ」

「カジミヤです」

「うるせー爆発しろ。爆発して爆発したうえで、もう一回爆発してさらに爆発して最終的に爆発しろ」

「アンタ爆発しろって言いたいだけだよなあ!!」

「誰のせいだよカジミヤ」

「……………」

なにも言い返せない梶宮に対して、となりの男は重くため息を吐く。

男の名は岡野。梶宮の先輩にあたる先々代の日本地区担当キューピットであり、現在は墮天使。因果をねじまげてテーマパークに住みつき、目につくカッブルを別れさせながらヒマを潰す生活をしている。

つまるところ、「恋に落ちる」前の梶宮と同じ、未発達な感情を持て余しながら日々を送る墮天使なのだった。

「そりゃな、俺らにとっちゃあ、しっかりした感情を持てるのはイイコトだろうよ。なにがしたいとか、なにが欲しいとか、そういう具体的な欲求にもならねえような、中途半端な願望だけじゃあどうにもならないんだからな」

岡野は投げやりに言っつて、ベンチの座面の背もたれ側を掴んで腰をずらす。ポップコーンやらパンフレットやらに気を取られている通行人が多いためか、足はしっかりベンチの下に折りたたんでいる。

「知ってるだろ。天使が人間に手を出したらどうなんのか、つてことくらい」  
それこそ、神話の時代。

天使は今よりも気軽に地上へ降りることができた。神の教えを説き、人を善い方向に導き、奇蹟を体现するという役目をともなつて。

ただ。天使たちは、地上に降りて役目だけを遂行するには、純粹すぎて賢すぎた。

「天使だつて、人間の女に手を出せば墮天するんだ。手を出すどころか、人間に化粧と武器を伝えて両目をえぐられたバカだつていいる。つうか、お前、自分の持つてるチカラつてのを、理解してはいるんだよな？」

天界に生きる天使たちがなにも考えずに役割を遂行できるのは、そこが天界であるからに他ならない。

地上に満ちあふれる欲求の数々を前にして、興味も持たずにいられる天使の数は少ない。現に、元・キューピットの墮天使は、日本国内だけでも十に近づいていると聞く。彼らの共通点は、全員が孤独だということだ。

「恋人を別れさせるチカラなんてもってるやつが、恋人なんて作れない。……  
つて？」

岡野の問いの真意を突くようにして、梶宮がぼそりと言う。

「できたとしても、妬みは買うだろうな」

「もしかすると、天界からも追われることになる」

「となれば、女を巻き込むことになる」

否定的な意見が、二人の口をついてでる。

しかし現実、キューピットの墮天使が恋を実らせるのは、それだけ難しいことでもあった。

その成功を同じ墮天使が望むことも、同様に難しい。彼らは嫉妬に生きる存在だからだ。

「さつさと定住して、カップルが別れるジンクスでも作っちゃえばよかったんだ。白鳥ポートでも観覧車でも、場所ならどこでもあるだろうによお」

「……そうしてれば、出会わなかったと？」

「さてね。運命の出会いってのが存在するのは、お前だって知ってるだろ」

梶宮が顔をあげる。対する岡野は、もう一度座りなおして座面から手を放す。

視線は交わらない。それぞれ、自分の正面に目を向けていた。

「手、出さないでいてくれますか、先輩」

「先輩どもには口きいといてやるよ、梶宮。墮天使の希望の星にでも、かませ犬にでもなつてこい」

ぶつきらぼうに言う岡野に、梶宮は苦笑で返す。未熟な感情を抱え込んでねじまがった墮天使の、精一杯の妥協案なのだろう。

梶宮が成功すれば、自分たちにも希望がある——岡野がそう言って他の墮天使を言いくるめるであろうことは目に見えていた。

で、と言って、岡野はようやく梶宮の方に視線を向ける。

「女の名前は？」

「……………」

沈黙。

すれ違ってそれきりの女の名を、梶宮が知る機会など一度もない。

「……お前さ」

「……はい」

「バカって言葉に失礼なくらいバカだな」

「返す言葉もございません……」

岡野は今日二度目の重いため息を吐いた。

三

『まもなく、一一番線に池袋・新宿方面行きの電車が参ります——』  
頭上から落ちてくる定型文のアナウンスに反応して、梶宮はどうか顔をあげた。

正面、向かいのホームからは丁度電車が発進するところで、シルバーの車体に引かれた緑色のラインが右方向へと流れていくのが見える。

岡野と別れ、当てもなく東京をさまよいつづけてすでに二週間が経過していた。都心部に限っているとはいえ、東京というエリアはかなり広い。行き交う人々も膨大で、その中からたった一人の人間を探し出すことなど、本来なら不可能である。

それも、一回すれ違っただけ。知っているのは容姿だけで、さらに向こうがこちらを認識しているかも怪しい——という相手であれば、再会は絶望的だ。

だいたい、彼女の行動圏が東京にあるのかが疑問である。  
出会ったとき、彼女は男と二人で歩いていた。

東京まで出てきていたのは、単に「デートだったから」かもしれない。

そして、彼女はしばらくの間、誰かとデートすることはないだろう。

その原因を作ったのは他でもない、梶宮である。

「運命の出会い、か……」

梶宮の声は、目の前を通過した電車の音でかき消された。

車体に押された風に叩かれ、梶宮は思わず目を閉じた。伸びた前髪が顔面に貼りつき、こそばゆさをとまなう不快感を与えてくる。

運命の出会い。  
いかにも幻想的で、夢にまみれた言葉ではあるものの、それは確かに存在する。

梶宮がかつてキューピットとして行っていた、「恋人同士を赤い糸で結ぶ」行為は、いわば祝福である。

恋とは本来、ほどけやすいものだ。小さないさかい、少しのすれ違い、ちょっとした勘違いで、恋人たちは簡単に縁をほどいてしまう。それらを乗り越え

られるようにキューピットは赤い糸を結び、簡単に離れてしまわないよう、ささいな加護を与えるのだ。

墮天使は、反対にその加護を奪い、縁をほどく機会を与える呪詛を得た。

とはいえ、キューピットの加護を必要とせず、その墮天使の呪詛も干渉できないほど強い縁を持つ恋人たちはいる。

赤い糸を結ぶまでもなく、呪詛によって切られても繋がってしまう、強い縁。その強い縁が引き起こすのが、運命の出会いと呼ばれる奇跡である。

それこそ、縁のない話だ。と、自嘲しながら梶宮は体の位置をずらす。電車から降りてきた人の列を避け、落ち着くのを待ってから車両に乗り込んだ。

生ぬるい空気が梶宮を迎え入れる。

誰かがつけているらしい香水の、柑橘系の匂いが漂っている。

名前も知らない女を探し始めた頃は敏感に反応していた香りも、いまや意識の片隅に追いやられる程度に関心が薄れていた。

同じような香りが多すぎるのだ。

柑橘系の香水、とひとくくりに言っても、銘柄ごとに特徴はある。

……はずなのだが、梶宮にそこまでの知識はない。加えて、それらを嗅ぎ分けることもできそうにない。

それどころか、そもそもあのとき感じた香りが香水によるものなのか、はたまたシャンプーや柔軟剤の香りなのかすら判断がつかない。

バカって言葉に失礼なくらいバカだな——岡野の何気ない言葉が、繰り返して梶宮の胸を刺す。

結局、墮天使は墮天使なりに独りでいるべきなのだろう。

扉が開閉するたびに動く人々を見ながら、梶宮はぼんやりと思った。

天使など、元々は神に使えるだけの存在にすぎない。それが嫉妬などという感情を抱いて地に堕ちて、一体誰に認知され、あまつさえ好感を抱かれるだろうか？

気管を握り潰されたような息苦しさが、梶宮を苛んだ。

呪われてしまえと神に唾を吐きたい気分だった。天使を作ったのは——すなわち梶宮を作ったのは神なのかもしれないが、墮天使というシステムを作ったのも同じ神ならば、呪う権利くらいは持ち合わせているはずだと自然に思えてしまった。

この孤独感が墮天への罰ならば、墮天の原因となった孤独感は一体なんだと



いうのか。

「……落ちたんだなあ」

呟いた梶宮の声は、停車駅を告げるアナウンスにかき消された。

初めて地上からビル群を見上げたときよりも、神を呪ったいまの方がよほど墮天を強く感じるとは。梶宮自身、思ってもみなかった。

初めて間近に感じた人の息吹より、どこにいるかも分からない神への呪いの方が強いインパクトを持っているなんて。

——と、思ったところで、梶宮はふと聞き覚えのある声に気がついた。

誰かの名前を呼んでいる、けれどもその名に繋がる顔が思い浮かばない、不思議な男の声だった。

梶宮に墮天使以外の知り合いはいない。狭く浅い関係を築いているのだから、声と名前を聞いて顔が出てこないなどということはありませんはずなのだが。

「今更、なに？」

注意の向いた耳が、応える声を拾う。硬く、低いトーンの女の声。緊張というよりは嫌悪に近く、若干震えているのが分かる。

そして、この声もやはり——聞き覚えがある。

柑橘系の香りがする。

視界の端にダークブラウンの髪が見える。

梶宮の思考回路が、「まさか」と期待し、「ありえない」と否定した。強烈な印象と記憶があいまいに裏付け、二週間で痛感した現実が希望を捨てると促した。

東京は広い。名前も知らない他人を探すには。

それでも、出会ってしまう縁を梶宮は知っている。その縁を無駄にはしていないことも。視線を移す。

車両内の人混みは、いわば大量の「他人たち」だ。彼らは互いに干渉し合うとはしない。自分の手元に意識を向けている人々の中で、たった一組の男女が向き合って小声で言葉を交わしている。

女は梶宮に背中を向けていた。けれど、男の顔に見覚えがあった。

過剰に密着していた二人の背中を、梶宮は知っていた。

神への呪いを取り消し、謝罪し、信仰心を取り戻すどころか、足にキスをしてもいいと思えるだけの力を持った二人組だった。

「あのときは、悪かったって」

「……なにが？」

「だから、ほら……」

彼らが、ぎこちない表情で、微妙な距離を保ちながら、他人のような会話を交わしている原因は、梶宮にあった。

そして、切られた縁が今まさに繋ぎなおされようとしているのは、見るからに明らかだった。

彼らの縁がどれほど強いものなのか、梶宮は知らない。

偶然が重なった結果の復縁なのか、それとも約束された必然の復縁なのか、判断をつけられるのは全知全能の神くらいなものだ。

けれども、「知らない」ことは「諦める」理由にはなりえない。

自分が墮天使で相手が人間だとしても、この恋を諦めると言わなかったのは、他でもない梶宮ではないか。

そしてなにより、名前も知らない彼女が復縁に乗り気でないのなら。

諦める理由も、ためらう義理もない。

もし強い縁を持った二人だったとしても、繋ぎなおすたびに切つてやろう。

「復縁フラグは、へし折らせてもらおうか」

呪詛ならぬ声が、キューピットとは正反対の力で二人の縁をほどく。

墮天使としてのチカラの行使。けれど変化はいつもより緩やかだった。

男を振り切る決意を、女に固めさせるだけの、背中を押すようなチカラだった。

「……ごめんなさい」

円満な別れ。ではあるものの、さすがにそのまま同じ車両に乗っていられるような雰囲気ではない。

見計らったように駅へ入った電車が、扉を開いて人を吐き出していく。女は人波に乗って男から逃れ、梶宮は今度こそ見失わないようにその背を追った。

ホームの柱に手をつけて立ち止まった女に合わせ、梶宮も足を止める。

陽に照らされたダークブラウンの髪が、水の流れのように輝いている。

彼女の方から吹く風に、柑橘系の淡い香りがまぎれている。

うまくいく保証はどこにもない。なにせ、梶宮が人間と話すのは、これが初めてのことだ。

それでも、行動に移さないよりはよほどマシだった。

耐え続けた孤独感を思い出し、梶宮は深く息を吸う。

そして墮天使は、人間へ近づくための一歩目を踏み出した。

<http://grimreaper.is-mine.net/>

